

歌の周辺

桜は植物だから、言葉を持つていない。しかし、言葉に当たる物があるとすれば、開花した時の蕊が〈さくらの言葉〉ではないか、想像してこの歌を詠んだ。

一つ一つの蕊は、光と会話している。光はどこから来るか。空の奥の奥、紺色の空から来ている。開花した桜の無数の蕊たちが、空の奥から来た光と、無音の会話をしている……そんな歌である。故郷愛媛の長浜町に沖浦觀音という仏を祀る寺があつて、広い境内に桜がいっぱい咲いていたのを思い出しながら詠んだ。

（高野公彦）

さくら咲き言葉のごときその蕊に光きて
てをり紺の空より

—『汽水の光』

【鑑賞】「桜」一連五首の三首目。さくらに光が射す情景を詠う。「言葉のごとき」の比喩から蕊の纖細さ愛しさ、さらには光の粒立しべ立ちが感じられる。「紺の空」は春らしからぬ空である。本集に「紺のゆふぞら」「紺いろのよぞら」の表現があるが、詠い出し「さくら咲き」の明るい音は、夕暮れとは考えにくい。「紺」ははるかな高さを表す。さくらに降る光はそのかなたから来るひかりなのだ。

(写真・木畠紀子)





ふるさとコレクション——184

DIC 川村記念美術館庭園（千葉県佐倉市）

DIC 川村記念美術館は佐倉市南西端に位置し、1990 年に DIC 総合研究所に隣接する場所で開館された。まるで西欧の城のような外観で 20 世紀美術中心の多彩なコレクションが楽しめる。また里山の地形を生かした約 3 万坪の庭園内にある。

庭園には白鳥が遊ぶ池を中心に、林間を通る自然散策路と芝生の広場があり、季節ごとに桜、睡蓮、ヤマユリ、大賀ハスや秋には紅葉、冬にはロウバイ、雪割草などが楽しめる。野外には彫刻が配され、ヘンリー・ムーア《ブロンズの形態》をはじめジョエル・シャピロ、フランク・ステラなどの作品が自然を背景に観賞できる。

隅々まで手入れの行き届いている庭園で、たっぷりリフレッシュすることができる。庭園散策は現在無料で人々の憩いの場となっている。

4 月下旬からゴールデンウィークにかけて普段は入れない DIC 総合研究所の散策路が開放される。よく刈りそろえられた鮮やかなクルメツツジの山は、まわりの緑と調和して目を見張るほど美しい。

（写真・解説 長谷川純子）